第２回栃木県「文化と知」の創造拠点整備構想策定検討委員会

議　事　録

令和５（2023）年 10 月 31 日（火）

栃木県総合政策部総合政策課

第２回栃木県「文化と知」の創造拠点整備構想策定検討委員会

１　日　　時

令和５（2023）年 10 月 31 日（火）　14 時 00 分から 15 時 55 分まで

２　場　　所

栃木県総合文化センター

３　出　席　者

【委員】池内淳委員、umi.委員、大川秀子委員、筧雅貴委員、君島理恵委員、木村好文委員、郡司成江委員、小林圭介委員、小林崇宏委員、佐藤香委員、須賀英之委員、関谷吉光委員、冨田章委員、橋本大典委員、松本千栄子委員、麦倉仁巳委員、村崎なぎこ委員、森いづみ委員、渡辺幸子委員、渡邉美樹委員

※小林圭介委員、森いづみ委員は Web 参加

【県】総合政策部長、総合政策部次長兼総合政策課長　外

４　議　　事

１　開 会

＜事務局から郡司委員を紹介＞

２　報告事項

(1) 委員現地調査について

(2) 県民ワークショップの開催結果について

＜事務局から資料１により報告＞

３　議題

(1)「文化と知」の創造拠点の一体的な整備について

(2)「文化と知」の創造拠点の整備地について

＜事務局から資料２、３により説明＞

～意見～

【委員長】

本日欠席の委員からも意見を伺っているので、御紹介いただいてから委員の方々に意見をいただきたい。

【県】

本日欠席の委員のうち３名の方から別途意見をいただいている。

まず、委員の１名からは、教育会館敷地への整備を検討できないかとの意見があった。これについては、先程資料３で説明したとおりである。あわせて、教育会館敷地への整備は難しいにしても、時間をかけてでもLRT沿線で検討すべきではないかという意見があった。

また、１名の委員からは、相互利用などの様々な相乗効果が期待できるため、ぜひ一体的整備を進めていただきたいとの意見を伺っている。

さらに、１名の委員からは、文書館については県職員が頻繁に使うようであれば県庁付近が良いかと思うが、一般利用が中心であれば、県体育館跡地で良いのではないかとの意見をいただいた。

【委員】

一体化については、一体化しないメリットも考えた上で、一体化するメリットの方が上回るという意見の集約があってから、一体化すべきという結論を検討委員会で出すことになると思う。一体化の最大のメリットは「文化と知」の相乗効果が図られる点である一方、一体化しないメリットは、県体育館跡地ほどの広大な敷地を確保する必要がないという点である。その意味では、LRT沿線の敷地や、県有施設や別の県有施設や民地を含めて選択肢は残るのではないか。あるいは、市町の美術館・図書館と同じ敷地内に作ることで、収蔵庫・専門スタッフを効率的な確保や、来館者が市町と県の美術館を一緒に訪問するなど集客面の相乗効果が生まれる。一体化を検討する中で、皆さんの考える一体化するメリットと、一体化しないメリットを議論したい。

【委員】

一体化をする限り、立地に関しては提案のあった場所しかありえない。「一体化をしなければ他の可能性が出てくる」という点について、一体化にはコスト面でのメリットがあるが、一体化をしないメリットがあるかはよく分からない。市の施設と県の施設の一体化に関しては、図書館では、オーテピア高知図書館（※高知県立図書館、高知市民図書館本館）とミライ on 図書館（※長崎県立・大村市立一体型図書館）の事例がある。建物が２つあるのではなく、１つの建物の中に作るものである。市と県では役割は全く違うが、同じ施設を合築することで、将来的なコストを抑えることができるため、可能性があれば検討する余地がある。少なくとも私は、一体化しないメリットは分からない。

【委員長】

一体化をするメリットは、イニシャルコスト、ランニングコストと両方あると思う。

【委員】

一体的整備を前提としていたため、一体化しない場合は考えていなかった。３施設はもともと利用者や扱うものが違っており、それぞれの立場からすれば各々の施設を持ったほうが良いとは思う。他方で、文書館は、扱う資料が専門的であるため、目的意識を持った方が来る場所であり、ふらっと来る方は多くない。文書館には、県の貴重な歴史史料や県の活動を跡付ける史料を扱っているという特色がある。こうした史料を活用してもらうため、調べ物をするときの行き先となる図書館と一体化し、美術作品であれば美術館、歴史史料であれば文書館で深く知る、という流れを作ることができると考えると、一体的整備が良いと思う。また、別々に作るとコストがかかるため、一体的整備はコストも抑えられるのではないか。

【委員】

一体化しないメリットで思い当たるものはない。それぞれの条件に合った敷地があるのであれば、メリットもあるとは思う。一方で、一体化しないことのデメリットはいくつもある。一体化によるコストの削減、例えば駐車場の共通化によるメリットなどは、一体化しないことで消えてしまう。図書館・文書館・美術館はそれぞれ相性が良い施設だが、歴史に興味がある方が美術館でも歴史的な美術作品を見に行く、美術作品を見てその時代の文化を調べたい人は図書館に行くなどの相乗効果も全くなくなってしまう。一体化しないメリットについては、思いつかなかったのが正直なところである。市町立の施設との一体化については、例えば、同じ宇都宮市内にある宇都宮美術館について、県立美術館までは距離があることもあり、仮に一体化できれば、両方を利用したい方にとっては大きなメリットである。ただ、市立の施設との一体化はハードルが高く、恐らく相当の時間が必要なため、現実的でない。

【委員】

敷地も全て独立したものにする場合のメリットとして、県内各地域に県の文化施設が分散していれば、各館の集客力により各地域が活性化するという点がある。大胆に県有文化施設を分散する場合であれば一体化しないメリットはあるが、そうでなければ、一体化したメリットの方が大きいのではないか。また、複数の施設を高層によって一体化するのは、デメリットのほうが大きいと思う。分築・合築については、同じ敷地内にそれぞれ単独の出入口を持っていて、美術品・文書・本の搬入の出入口も独立して持っているが、例えば、講演会で使えるようなホールは共有しているだとか、利用者の動線で自然に相乗効果が起こるような交流スペースは共有しているとか、管理面においては燻蒸の施設が共有できていると、効率化とサービスの向上が図られると思う。

【委員】

一体化について、栃木市では文学館と美術館が非常に近いところに建っており、両方見ていただけるなどのメリットがある。文学館にも本を置いているが、図書館も近くにあれば、文学館にない本も図書館で調べられることもあるし、美術館の展示について調査をするにしても非常に便利であり、一体化に

ついては良い効果があると思っている。今お話のあった、１つの建物にしてしまうというのは、私は魅力がやはりなくなるのではないかなと思う。最初の説明のときに、分築なのか合築なのかの話があったが、それらも今後十分に検討していかなければと思っている。

【委員】

LRT の観点では、もったいないというところがある。宇都宮駅東口に LRT が通り、この２か月で 82 万人が利用したことから、将来的に、LRT の周りは活性化して、その外側は交通が不便になるのではないかと危惧している。建設予定地は桜通り十文字から歩いて行けない範囲ではないが、LRT とつながる新しい交通機関を何か考えていかないと不便ではないか。３施設の視察を通し、なぜ既存施設の改修ではなく移転なのか、新しい設備を作らなければいけないのかを感じた。未来を見たときに、栃木県・宇都宮市としてどのような「まち」にしていきたいかは大きな問題。日本の人口は減りインバウンドも少なくなる中で、選ばれる栃木・宇都宮と考えたときに、未来にどんな美術館・図書館がそこにあるのかをイメージしながらの検討が重要と感じる。一体化はとても有益なことだと思うが、未来のことも踏まえた上で検討してもらえるとありがたい。

【委員】

宇都宮市から遠い地域の立場としては、日本の一極集中は東京、栃木県の一極集中は宇都宮という、なぜ宇都宮ばかり、という意見もあると思う。一方、街中でこれだけ広大な敷地はなく、間違いなく LRT も西側に走るだろう。美術館は閑静なところにあるのも良いが、他県の美術館はデートスポットになっているなど、多くの人々が集まり、様々なイベントも行われている。これから先の子どもたちのことも考えれば、県体育館跡地は場所としてふさわしい。図書館も行ったことがない方も多いと思うので、行ってみたい図書館を作ってもらうのが良い。

【委員】

宇都宮一極集中の話が出たが、県北地域の居住者からすると、宇都宮にあってもらうとありがたい。例えば県南に行ってしまうと、栃木県は縦に長いので、県南にはなかなか足を運ぶことができない。宇都宮であれば用事のついでに美術館・博物館に行くこともできる。それを楽しみにしている１人なので、１つの場所にまとまっていれば便利だと思う。現地視察以前は、県体育館跡地に大きな土地があるのか疑問だったが、実際に見てみると非常に広く自然も豊かで、「文化と知」の創造拠点にふさわしいと実感した。敷地には大きな木が点在しており、これはできれば残してもらいたいと思った。３施設を視察した際に、一番新鮮だったのは文書館である。普段目にすることのない縁のない場所だったが、燻蒸の施設を美術館と文書館と共通で入れるというのはとても良いことだと思う。文書館に注目が当たるのもとても大切なことではないかと個人的に思う。一体化することについて全く異議はない。

【委員長】

中心市街地から比較的近い場所に空いている広い土地があるのは県体育館跡地しかない。課題は、県内外からの来訪者に対する交通アクセスの更なる強化であり、桜通り十文字等にLRTのトランジットセンターを整備するなど、市との協議の上で、LRTや中央警察の計画の中に、交通の結節についても盛り込んでもらう必要がある。県教育会館付近は、当面LRTの終点になると思うが、1.5km程度の道を、電動自転車等で中学生・高校生でも行けるような仕組みや、将来的には遊歩道やアクセス道路の整備などもまちづくりの中で考えていってほしい。また、JRや東武宇都宮線の駅から県立博物館、「文化と知」の創造拠点、その他周辺施設等を周遊できるよう、県と市と交通事業者とで協議してもらえると良い。県立施設にふさわしい機能・役割、他の市町との連携は、第３回検討委員会以降に議論したい。施設をどこまで共有・一体化するか、管理運営についても、今後の議論になると思う。

各委員の御意見を踏まえて、それでは、基本的には、３つの機能を一体化し、その機能をより発揮させるようにするための前向きな議論を進めていくということ、場所については、当面、整備地で考えていくと、これらについて異議あるか。

異議はなく、３施設は一体的に整備すること、また、整備地は県体育館跡地とすることで了承された。

(3)「文化と知」の創造拠点の基本理念の検討について

＜事務局から資料４により説明＞

～意見～

【委員】

コンセプトの部分で、建設にあたって何を大事にするかを考える必要がある。美術館では、展示に不適切な光が差してしまう建設案がそのまま採用され、後に大きな改修が必要となったことを視察で伺い印象に残った。３つの視点も大事だが、特に設計の段階で、実際に運営に関わる人たちと連携を取ることが重要。二重の工事は税金が無駄にかかるため、設計の段階で現場の声を聞いていく仕組みが必要。利用者としての視点では、ワークショップが前回開催されているが、そこで出た意見は実際に利用していく人たちの生の声、貴重な意見だと思う。その場で話し合われたときには、付箋を貼っていろいろな意見が出されたと伺ったので、そういった資料も別紙でまとめるのではなく、検討委員会の場で見て、生の声を自分の中にまず響かせた上で、このような場で反映させていけたら良いのかなと思った。

【委員】

アーティスティックなデザインであることも大事だが、学芸員の現場の方の意見を吸い上げた建物であってほしいと思う。最近、SNS等で話題になっている図書館はデザイン優先で作られており、高い書

棚があるが、取れない位置に本がある。図書館を使う人の中には子どもも多いため、あまりアーティスティックなものではなく、現場の使う方の利便性を考えたデザインであってほしい。県内のホールもコンペで決まったデザインであるが、実際には運営部分でやりづらいと伺ったので、現場の意見を聞いた建物であってほしい。利用者としての意見では、県立文書館と県立図書館は県庁の駐車場を使うしかなく、２時間まで無料となっているが短いと思う。放置車両を防ぐという意味と、中に入ることが前提でじっくり楽しめるという点の両立が、ベストな仕組みではないかと思う。

【委員】

一体化について、外側からは格好の良い建物として見えるが、運用する側からのいろいろな工夫・苦労が分かったので、ぜひとも現場の意見を聞いてもらいたい。一体化して合理的になるといっても、やはり動かすのは現場の人たちであり、ただ場所が１か所に集まったところで、その方々の協議とか協力なくして合理化は図られない。まずは、現場の意見をとにかく聞き、より高い効果が出るようにしてくことが肝要。文書館と図書館が一体化するのは、これまで利用してきた施設でもあって納得するが、美術館も一緒となると、３施設で共通しているのは収蔵庫だと思う。見学に行った時も３施設とも収蔵庫が足りないという話があり、一方で、文書館・図書館もそうだが、美術館は収蔵庫で安全に作品を収蔵する、保管するということが非常に重要な役割である。作品の公開と同じぐらい重要となってくるため、収蔵庫の安全面を第一に考えていかなければいけない。

【委員】

コンセプトについて、私は最初の視点の「開く」に似ているかもしれないが、「疲れない施設」というのをぜひ考えてもらえればと思う。先ほど交通の便という意見があったが、行くまでに疲れないこと。それから、中を利用するわけだが、たいがい美術館に行くと、２時間近く立ちっぱなしなのでどうしても疲れてしまう。そういう意味で休憩できるスペース等をたくさん作ってもらいたい。中の施設も飽きさせない、退屈させないものにしてほしい。これは３施設に共通して言えることである。楽しいという点は当然だが、県の施設の在り方のこれからの１つの課題だと思うが、県の施設はどうしても行くのに緊張してしまい、入っていくのに気疲れしてしまう。そういう意味では気疲れしない施設は１つのテーマとしてあっていいと思う。私が考えたところで、３点の中ではいちばん「開く」が気になった。

【委員】

誰もが利用しやすい施設ということで、バリアフリーの観点で、例えば図書館では、本棚の隙間にベビーカー等が通れるかなども重要。また、先ほど意見があったように、高い位置に本があると、東日本大震災を被災地で経験した自分としては、どうしてもそういった地震が起きた際に落ちてくる危険性を考えてしまう。多くの方が安全に利用できる場を作ることは重要である。また、現地に伺った際に、保管の現状を見て、地震が起きた際に資料の損傷等も起こるのではないかと考えた。防災の視点も重要だと思う。

【委員】

利用者の立場から申し上げると、３施設にプラスして交流の場所を考えていただきたい。図書館には狭い交流の場所はあったが、３施設まとめての新たな場を考えてほしい。また、館内だけでなく、先ほど大きい木を残してほしいとの意見も出たが、屋外スペースも１つの考えとして検討してもらえると良い。３施設とも収蔵庫が狭くなっていることや、職員数が足りないなどの話も出たので、やはりバックヤードの問題なども、収蔵施設や燻蒸施設の共同利用の意見もあったが、３施設での共同利用の方法もあわせて考えてほしい。

【委員】

先日現地視察に参加し、大変勉強になった。３施設ともバックヤードの充実が大きな課題と実感した。美術館の所蔵作品の保管も重要だが、文書館、図書館においても史料・書籍の紙の劣化という現実的な問題と格闘し、保存に関していかに苦慮しているかを改めて感じた。新しい施設では、史料や書籍の保管の面にも十分な配慮をいただけると良い。バリアフリーについて、車いすの場合は階段や急な傾斜は大きなバリアとなるため、新しい施設では車いすで来ている方も使いやすいよう配慮いただけると良い。駐車場については、車いすの運転者のために乗り降りにある程度のスペースが必要であったり、ストレッチャーを使用した来館者のため、障害者用の駐車スペースはある程度の広さが必要であったりするため、そういった点にも配慮いただくと良い。新しい施設を作るにあたっては、現場の職員の方々の声を聞いて進めていただくのが良い。

【委員】

３つの視点の中で「つなぐ」という言葉が気になった。「つなぐ」は教育現場でもよく使う言葉だが、設計者の思いと展示管理する人の思いをいかにつなげるかも大切だと思う。文化財を残していくことも伝統を「つなぐ」ことであり、バックヤードの設備についても、物流のデジタル化によって働き方改革が進み、現場で働く人の働き方を「つないで」いく形になる。将来に柔軟に変更できる施設が望ましい。文書館で古文書の目録をとっている方がいたが、「どのような勉強をしたらこの仕事ができるのか」と感じてもらうなど、各施設を見ることが子どもたちにとっても良いキャリア教育になる。利便性も大切だが、学校と違った学び方ができる非日常な場所という観点も新しい施設には入れてほしい。県の施設が宇都宮にできることは大賛成である。県内各地域で同じような施設が欲しいとなった際には、モデルとして協力するような施設になってほしい。県の施設が盛り上がるだけでなく、県全体の文化向上に向かっていくような、地方と中央がつながるような施設にしてもらえると良い。

【委員】

残すものは当然残さなければいけないが、課題として、残すと物理的に場所を使ってしまうため、場所を考えてデジタルで残すという方法も少しずつ検討していかないといけない。利用者側の立場からすると、視察の時にも話題になっていたが、検索が外からできるかどうかなど、実際にその場所に来ない

と分からないという課題があると思うので、検索のしやすさや、探しやすさなど、まずは例えばどこの場所でも電子図書館で調べられるような、そうしたデジタルの活用を積極的に行うことをコンセプトの中に入れていくと、他よりも進んだ、素晴らしい施設になるのではないか。

【委員】

先ほど委員から発言のあった通り、「文化と知」の創造拠点がモデルとなって、各市町でもそれを真似したい、何かを作りたいと気運が高まると素晴らしいと思った。視察の際に、美術館の方が、カフェがすごく小さいと話していたが、カフェやホールは３施設共通で良いのではないか。それぞれの館を利用した方がカフェに集ってそこで情報交換できたり、交流があったりすると良いと思う。そこには子どもも集えて、その親も集えるよう場所があると「つなぐ」、「開く」というところ、それから小さい子どもの職業教育ではないが、「生み出す、育む」の全てが実現できるかなと、皆さんの話を聞いて、すごく明るい未来が見えてきた気がする。

【委員】

この間、国体があったが、いちばん大きなテーマは「おもてなし」だった。「もう１回行きたい」、「もう１回あそこで勉強したい」、「今度いつ催しがあるのか」というような美術館だったり図書館だったり文書館であってほしい。場所は最高なので、ここしかないので、何とか生かしてもらいたい。ぜひ、栃木県にふさわしい拠点ということをしっかり考えた上で検討してほしい。

【委員】

３つの視点「開く」、「つなぐ」、「生み出す、育む」について、コンセプトとしてよくまとまっていると思う。今後の検討では、３つの視点をどのような言葉で表現していくのかというところが重要。コンセプトは、誰でも分かり、それに向かって、いつも忘れないでいるものなので、そこが重要だと思う。皆さんの話も聞いて、わくわくして行ける場所になるととても良いのではないかと思った。そして、そこで働きたい、そこに行きたいという、未来に続いていく施設を作ってほしい。先ほどの発言にあったように、子どもたちがこんな職業もあるのだなということが見られる、オープンな場所がたくさんある施設になると良い。３施設に入館しなくても利用できるスペースがある、例えば、先ほど発言のあったように、デートで使う、カフェに行ってみる、ちょっと天気が良かったからここでコーヒーを飲む、そんな場所にしていただけたら良い。

【委員】

市立の美術館や図書館を見る機会が多いが、これまでの美術館の役割というのは芸術を鑑賞する、美術作品を見るというのが主で、図書館は本を貸し出すという機能が主であったが、今の図書館・美術館は全く変わっていて、驚くような場所がある。最近見た図書館では、広い空間で親子が絵本を見ながら楽しむとか、ゆったりとしたソファーでくつろぐとか、そういった空間がある。先日伺った美術館では、

空間ばかりが広かったが、そこに市民が集まり交流する中で何かを作り出していくという機能を持っていた。ここで書いてある視点の「生み出す、育む」機能がこれからは重要になってくるのではないか。しかしながら、今の事例は市立の美術館・文学館であって、県立の在り方がどういう役割を果たしていくのかも問われていると思う。全国の県立でこういう機能を果たせている美術館・図書館があったらぜひ教えてほしい。

【委員】

私も皆さんと同じように、前回、現地視察をした時に、各施設の方がおっしゃっていた、こういう収蔵庫が必要だとか、書庫がこのぐらいほしいとか、そういうものも吸い上げた上で、考えていってもらいたい。また、どこに行くにしても動線が悪く、最初から行きやすい、入りやすいように作られた場所ではないと思うので、行く方のことを考えてどんな方でも見やすい施設になると良いと思う。現在の県立図書館では、学生の勉強するスペースだったところが保管場所になっていると聞いたので、図書資料を借りた際に学生が勉強できると良い。先ほど発言があったように、家族で土日に来た際に１日そこで楽しめるようなカフェ・レストランの施設があり、外のスペースを活用したようなものもあり、１日楽しめて、また来たいなと思えるような、コンセプトとつながる場所になれば嬉しい。

【委員】

図書館に関しては、在り方の検討会が県であり、その中で市立・町立との役割分担は整理されたと聞いている。今回改めて新しく作る際に、その在り方の検討をどのように生かすのか、または再構築していくのかを考えていかなければ整合性が取れない。全国的には、福島県立美術館と福島県立図書館は同一の敷地にあると伺ったが、40 年前に建てられている施設のため、最近の一体的な整備の事例として参考になるものがあれば教えてもらいたい。各館を視察し、収蔵庫を増やさなければいけないと改めて感じたが、県有施設であるため、財源の観点は非常に大事である。この先 50 年間を見据えて収蔵庫はどの程度必要なのか上限も考える必要があると思う。現場の声を大事にしつつ、議論を忘れないようにしなければならない。美術館は収益化の観点も大事であり、集客力を持った施設を目指す場合、無難な施設になってしまうと、行くことに対する気持ちを高めてもらえない。現場の声も大事にしつつ、目を引くようなデザイン性も大事にして考えたい。

【委員】

３つの基本理念はバランスが良く、県民がサービスを享受するだけではなく、自ら創り出すことを意識されている点が良い。一方で、県の施設としての役割は、図書館の場合は、県立図書館自体が県民に直接サービスをする施設であると同時に、市町村の図書館をより良くしていくサポートの役割も持っている。研究施設としての拠点、それから人材育成の拠点、ネットワーク作りの拠点といったような、県全体の他の施設とも一緒に協働する視点があるとより良いのではないか。同時に、バックヤードのことは多くの委員も言及しているが、栃木県では、最後に必ずここには資料があるというのが、県立図書館

に期待されている点だと思う。利用者の利便性ということで、デジタル化は絶対に外せない方向性と思うが、デジタル化をしつつ、現物を保存・継承していくことは押さえておく必要があると思う。さらに、利用面で言えば、とても魅力的でモデルにしたいというような施設であればと思う。

【委員】

私も、基本理念の３つの視点は大変よくまとめられていると思う。専門性というところでいうと、視点②の「つなぐ」の中で、資料の保存・継承、収集した資料を適切に保存・研究し、次世代に継承していくという文言が入っているし、「開く」ではユニバーサルデザインなど、さまざまな利用者に対する配慮も行き届いていると思う。ただ、視点やコンセプトを作ったときに、実際の現場でどのように活用していくかが重要になってくる。単なるお題目にせず、実際の建物の建設の段階はもちろん、建物が完成した後の活動にもきちんとこういったものを反映させていく姿勢を見せていくことが重要。

【委員】

今後作っていく基本理念・コンセプトを導き出すための観点ということで、３つの端的な言葉でまとめられていると思う。３つの言葉の下位にさらに小項目があって、計９個の具体的な説明が書かれている。これらについて特に異論はない。ただ、視点の③「生み出す、育む」については、おそらく主体は県民と捉えている。②「つなぐ」については、もし県民が主体となれば「つながる」という言葉が出てくるのではないか。①「開く」については、県民が主体であれば「出会う」「集まる」などの言葉が出てくると思う。今後、理念をどの視点から書いていくのか、施設、県民どちらの視線寄りになっていくのかについては、検討する必要がある。また、視点は、３つ程度が適切であるが、その他に、文化・知識・研究の拠点としての役割をうまく発信していき、県民だけでなく、県外・インバウンドにもつなげていけるように発信力を強化していく必要もあると思う。

【委員】

３つの視点は非常に良いが、主語が何かというのは意識したほうが良い。それによって言葉遣いが変わってくる。「つなぐ」なのか「つながる」なのか。最終的にまとめる際に、主語が誰なのかで動詞の使い方が変わってくる。強調しておきたいのは、３つの施設を一体的に整備した場合、機能や役割が違うため、完全な融合は相当難しい。リアルな空間での融合は限界があるが、デジタルの世界では融合できる可能性が高い。50 年後の世の中の情報構造・文化水準・技術水準を想像するのは難しく、おそらく 50 年前に今の状況・社会制度・価値観を想像することはできていない。それを置いてもなお、バーチャルな世界はいろいろなことを可変的に変えていける。空間は変えられなくてもバーチャルの世界は変えていけるため、デジタル空間で３施設・県民がどのように協働ができるのか、これから先の視点、未来の視点を踏まえながら考える作業がとても大事。そのため「つなぐ」「つながる」はとても良い。

【委員長】

一通り意見をいただいた。事務局にお願いしたいのは、現場の声を聞きたいということなので、現在３施設の運営に携わっている方に、新しい施設をどういったものにしていきたいか、どう運営していきたいかについて、個別ではなく一緒に議論していただき、次回の検討委員会に出していただきたい。それから、複合施設のメリットを最大限引き出すということで、事例を整理していただきたい。また、県内の市町立の美術館・図書館・文書館・文学館がどこにあってどのくらいの規模でというのを整理して、それらと県立の中央の施設がどのように連携ができるか１つの参考にしたい。この３つをお願いしたい。

収蔵庫の話が出たので専門家の方にも伺いたい。これらの施設が 60 年、70 年使っていくことを考えると、将来的な対応として、新しいニーズが出てきたときにフレキシブルな空間をどのように作っていくか、あるいはもっと先の、建替えの時の用地とか、増設のときの用地をどう残していくのかなど、将来対応についてどんなことを今のうちに考えなくてはいけないか、教えていただきたい。

【委員】

図書館と美術館との大きな違いは、デジタル化が進んでも現物を見ることに大きな価値がある点。図書館は、大抵は情報が得られればよいためデジタル化になじみが良い。紙の本や紙の雑誌の量が減少し、デジタルに大きな予算を費やすようになってきている。将来的に、紙の本・雑誌はある程度保存し、本の置き場所であった場所は人の居場所になるのではないか。アムステルダム大学図書館では完全に書庫を校外に移転・デジタル所蔵化することで、人が研究、協働、学習できる場に変え、紙の本を読みたい場合は注文して取り寄せるなどの変化が起きている。一方で、美術館は現物を見ることに価値があり、文書館は記録を徹底的に残し続ける必要があるため、絶対的に今後収蔵スペースは増加する。市町の図書館では自らのキャパシティに応じて図書を除却していくが、都道府県立図書館は除却できない。県内で最後の資料は都道府県図書館で残さなければいけない。除却、保存の選別を行い、保存場所と、人々が「開かれ」、「つながり」、「生み出す」場所とのバランスを上手に図ってもらいたい。

【委員】

先ほどの図書館のお話を非常に興味深く伺った。御指摘の通り、美術館にとっては現物が何よりも重要。デジタル化が進めば進むほど、実物が重要になってくるのが美術館の世界。収蔵庫の考え方もおのずと変わってくる。美術館では実物を常時入れ替えて見せていくことが必要なため、収蔵庫が身近にないと、その都度大変な労力とお金がかかる。先ほどの理念に「つなぐ」とあったが、美術資料を継続的に収蔵することは、栃木県の文化を守るという意味では非常に大きな意義がある。そうなると、収蔵庫は大きければ大きいほど良いことになる。もちろん限界はあるものの、少なくとも向こう何十年間は持ちこたえられるような、それだけのスペースを確保するのは、美術館にとっては絶対的に必要である。

【委員】

文書館が所蔵する史料は県が作成又は取得した文書と、民間から収集した文書の２つであり、収蔵庫

は永遠に大きくならざるを得ない。県の文書館は、地域にある歴史史料の最後の砦であり、貴重な各家に残っている文書が収集されている。どうしても市町村が保存することはできず県に頼らざるを得ないため、民間から収集する歴史資料は増えていくこととなる。デジタル化が進めば、県の公文書の紙での保存は相対的に減っていくだろうが、デジタルでの保存には別のコストもかかる。実際に書庫を新しい施設に作った後、利用の少ないものやデジタルで見せることができるものは、別の場所で保管する。100年、200年分というわけではなく、向こう何十年間のスペースを新しい施設で確保し、土地の安い場所や、地盤のしっかりした場所などに第２、第３の書庫を作っていく選択肢は出てくると思う。

【委員】

図書館は、オリジナルではなくコピーを多く持っている点において、デジタル化によって収蔵スペースの問題は緩和されていくと思う。ただし、現在、世の中に出版されているもののうち、公共図書館で利用できる電子書籍は非常に少ない。今後 10、20 年のスパンで収蔵スペースを考えつつ、その先何十年分の収蔵スペースが要るのかは、細かい議論が必要。県立図書館のため、専門書や、県内に１冊は書籍を残すなどの必要が特色として出てくるかと思うが、どの程度デジタルで保存が可能か。小さい子どもの場合、リアルな肉体をもった人間として、デジタルだけではなく紙の資料からも情報を得たほうが良いという研究結果も出ている。大人が情報を効率よく手に入れられれば良い書籍なのか、もっと身体的なことも考えながら進めるのか、大きなビジョンで収蔵スペースの話はしていく必要がある。

【委員長】

例えば中心市街地に子ども図書館のような分館があるとか、県庁前に県民美術ギャラリーがあったり、宇都宮駅東口に県の情報発信ができるような展示スペースがあったりなど、サテライトも考えられるかと思う。収蔵庫についてもできれば手元にあった方が学芸員は便利であるが、将来の 50 年後、100 年後のことを考えると郊外にサテライト収蔵庫を置くことや、そこで若干の展示も将来的にできると良いのではないか。

【委員】

各館、それぞれ一生懸命頑張ってそれぞれの役割をやっているかとは思うが、なかなか人が来ていないことが問題。例えば美術館・図書館・文書館の利用だけではなく、おいしいスイーツを食べたい、あそこに行ったら楽しい、もう一度行きたい、というような、集う・交流することを目的に多くの方に来ていただき、あそこはいいよ、楽しいよと、人づてに伝わるような施設になれば良い。

５　閉　会

【総合政策部長】

本日、現在の候補地で一体整備を進める方向性については了承いただいたと認識しているが、一方で、委員長にもまとめていただいたとおり、LRT の整備を視野に入れたアクセス性の更なる向上、そして県

立施設にふさわしい独自性と市町施設との連携、さらには運営を含めた施設共有の在り方など、まだまだ課題もあることを改めて認識した。未来に向けて県民が誇れる施設、委員からの発言もあったが、もう一度行きたくなるような、全国のモデルになるような施設にしなければならないという、重責を感じている。県としても本日の議論も踏まえて、引き続き検討を進めていく。委員各位には今後も支援・協力をお願いし、お礼の挨拶に代えたい。

【委員長】

今日の議論をとりまとめていただき、コンセプト、立地に関する課題や施設・運営に関する議論もある。それを次回以降の検討委員会にて審議していただければと思う。

＜事務局から、第３回検討委員会は、１月 10 日（水）14 時から開催したい旨の説明＞